
とある血界師の肖像

まっこりさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある血界師の肖像

【Nコード】

N0304Q

【作者名】

まっこりさん

【あらすじ】

己の技能を他者に付与することのできる技術が確立され、互いに売買されている社会。そんな社会に生まれた一人の青年の物語。

プロローグ

ウェルテニア大陸。

そこでは「血界師」と呼ばれる人々による、奇妙な社会制度が敷かれていた。

己の技能を他者に付与する技術。
継才術。

智慧の女神ニクヴェスによって人々に与えられた力だと言われている。

人々は己の技能を高めることに邁進し、培った経験を次代へと継承することが美德とされた。

より遠くへ！より高みへ！

代を重ねるごとにその技能は洗練され、多くの血族を形成していった。

そして、その中でも特に有力な技能を持つ者は「血界師」と呼ばれ、人々の畏敬を集めた。

やがて6人の「血界師」達によって、6つの王国が形成されることとなる。

徳の国、アルンフィア

知の国、ノーリッジ

武の国、トユースフォード

商の国、オムリス

工の国、アーバーク

農の国、ダルレット

各国はこぞって新たな「血界師」の育成に力を入れ、所有する「血界師」の数を競い合う。「血界師」は貴族に列せられると共に多大な恩賞が与えられたため、人々の技能向上への情熱は否が応でも高まった。

やがて貪欲に技能向上を目指す人々の間で、互いの技能を売買することが流行するようになる。技能ギルドの誕生である。

ギルドでは有用性、希少性、習得難度によって各種技能が等級付けられ、価格が決定される。ギルドの誕生によって、技能を金銭に換えることが一般的となり、技能そのものの価値によって富を得ることが可能となった。

この物語は、そのような時代に生まれた、一人の若者の物語である。

プロローグ（後書き）

とりあえず初投稿。物語のプロットは書きながら考えます。

幼少期〜青年時代

その訃報は突然にやって来た。

いつものようにノーリッジ図書館で蔵書漁りをしていた所に、老僕
のダトラム翁が慌ただしく駆け込んでくると、父の訃報を告げる。

ヴィートウスの父、ミオルク・アルドスターは腕利きの「仲介士」
だ。

知の国、ノーリッジを拠点にし、先代の努力もあつて中流貴族に列
せられている。

母は5年前に肺を患って死去している。

この度、近在のテシアンへ「仲介」の仕事へと向かう道中で何者か
に襲われたのだと言う。遺体を発見した村人が、付近の治安所に連
絡を入れて発覚した。

遺体は無惨に切り裂かれ、指先に切断の後が見られる等、拷問と思
しき傷跡が残されていた。

何らかの犯罪に巻き込まれたものと思われるが、生憎父は近隣の評
判も悪くなく、「仲介士」としての評価も高い。誰かに恨まれるよ
うな心当たりもなく、真相な不明。犯人は捜索中のまま、物取りの
な犯行として処理された。

12歳の少年には少し酷な事態ではあつただろう。

しかし、当の本人はいささかも動揺を見せず、治安員からの報告を
冷静に受け止めていた。あるいは、突然の事態に心を麻痺させてし
まったのかもしれない。

少年の不幸はそれだけには留まらなかった。

父が「仲介」に当たって、ベムシエル商会から多額の借金を抱えていた。今回の取引の購入資金に当てたとのことだ。しかし、技能の売却前に当人が死去してしまったため、技能は消失し、借金のみが残された。

屋敷や土地を売却しても借金返済に未たず、差額分は自らが奴隷として買い取られることとなる。

こうして12歳のヴィートウスは中流貴族の子息としての安楽な日々を終える。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ヴィートウスが引き取られたのは、商の国、オムリスの中流貴族の家だった。当主はキルディ＝デルンロイドという五十過ぎの小太りな中年で、禿げ上がった頭髪と、口の両端に生やした髭が妙に愛嬌のある男だった。

商人としての技能を代々受け継ぎ、ダルレット産のアシアネ油の販売を生業としている。

デルンロイド家での生活は居心地の悪いものではなかった。

この大陸の奴隷制度は奴隷の人権を認めていたため、謂れのない体罰を受けることはなかったし、この家の家風なのか、他の奴隷たちにも卑屈さはなかった。単に食と住を保証してもらう代わりに労働力を提供している、という風に割り切っているようだった。

また少年より2歳年長の長女、ウェシルが何かと世話を焼いてくれた。ウェシルは商人の娘らしい、活発な栗色の髪をした少女だった。周りには年長者しかいなかったため、年頃も近いヴィートウスは、少女の格好の遊び相手となったようだ。

早朝から深夜まで働き詰めのヴィートウスだったが、仕事終わりに部屋まで押し掛けて話をしたり、週に一度の安息日には決まって外までつれ回すのだった。

少年にとって何よりも有り難かったのは、彼女が様々な書物を貸してくれたことだ。彼はこれらの書物から、国家の歴史や地理、法学や会計学を独学で習得した。

少年は体力はないが利発な子供だったので、いつしかキルデイにも認められ、小間使いから店の番頭、アジアネ油の買い付けまでも任せられるようになった。

実地研修で商人としてのイロハを学んだ少年だったが、彼には固い誓いがあった。

それは父の仇を討ち、「仲介士」として大成することだ。

「仲介士」とは継才術を用いた技能の売買を生業とする者を言う。しかし彼の父ミオルクは、息子に「仲介士」としての技能を継承せず亡くなってしまったため、一から経験を詰む必要があった。あるいは最も大きな損失は、この未継承の技能の喪失であったかもしれない。

「仲介士」になるにはまず、奴隷の身分から解放されなければならない。この時代の奴隷は身請けされた際の代金を支払うことで、自

分自身を身請けして、奴隷としての身分を解放することができた。彼はまず、身請けするための代金を貯めなければならなかった。

少年は仕事の合間に読んだ書物の知識や、油の買い付けの際に得た諸国の地理・相場等の情報を、技能ギルドに売却した。こうして彼は、僅かながらではあったものの、着実に解放のための資金を貯めていった。

そしてヴィートウスが18歳になり、少年から青年へと成長を遂げた頃、彼の手元には身請けのための十分な資金が集まっていた。

当主であるキルディに身請けの件を伝えたと、そのままデルンロイド家への仕官を勧められる。商人として、有能な奉公人が去ることを惜しんだのだった。

彼は仕官の件を固辞しつつ、6年に渡り生活したデルンロイド家を去ると、故郷のノーリッジへと足を向けるだった。胸中には長女ウエシルの、拗ねたような、それでいてどこか心細げな姿を残して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0304q/>

とある血界師の肖像

2011年1月13日03時01分発行